或問　WAKUMON　53
No. 1（2000）, pp.53～67

モリソン訳『神天聖書』について
その新約部分とくに「使徒行傳」のことばを中心に

塩山正純

提　要

基督教传教士的汉译圣经，是汉语口语史研究中不可缺少的重要语言材料之一。《神天圣书》由第一位来华的新教传教士，马礼逊译出。《神天圣书》的文体被分类为“文理”文体，但是，马礼逊认为，翻译应避开文言、尽量使用普通的语言。他以《三国演义》的通俗语言为样本，完成了《神天圣书》的翻译。

本文以《神天圣书》中的〈使徒行传〉为主要材料，与《三国演义》和文理文体汉译圣经的代表作《新约全书》(1864)等进行比较，通过对若干关键词（虚词）、口语特色词的分析，探讨本书的语言特色。

0．はじめに

宣教師が手がけた漢訳聖書は質・量ともに十分な資料であり、宣教師が学んだ中国語がどのようなものだったのかを考える上で、重要なものと言える。R.モリソン（1782-1834）は、プロテスタントの宣教師として最初に中国に渡来し、聖書の漢訳、英華・華英字典の編集、中国語学研究の３つの大きな仕事を成し遂げた。その１つ聖書の漢訳が『神天聖書』(1823）である。漢訳聖書の文体分類で『神天聖書』は所謂「文理（Wenli，High Wenli)」に入れられる。しかし、モリソンは翻訳にあたり、「忠実で、明快で、単純であることを心がけ、古典のことばよりも、ふつうのことばを選び、洗練より分かりやすさを取った」と言い、また『三国志演義』のような文体がふさわしい、とも考えていた。本稿では『神天聖書』の中で、モリソンが最初に翻訳を完成させた「使徒行傳」を中心に、モリソンが目標とした『三国志演義』や、「文理」の代表作ブリッジマン＝カルバートソン訳聖書などとの比較対照を通して、『神天聖書』の文体や特徴のある語彙について考察したい。

1．ロバート・モリソンについて

ロバート・モリソン（Robert Morrison 1782-1834）は、1782年、イングランド北部ノーサムバランド生まれ。[1] 宣教師となり、1807年イギリスを出発、アメリカを経て来華（広州)。1810年「使徒行傳」の中国語訳を完成。また「中文法程（1815)」を作成、印刷のためこれをベンガルに送る。1813年に中国語訳の新約聖書、1819年に新舊約聖書の漢訳を完成させた。1823年『英華字典』『神天聖書』を完成し出版したのち、1834年に死去している。モリソンの伝記については都田恒太郎1974に詳しい。

2．『神天聖書』の構成

『神天聖書』は、MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE,1867に紹介されている。その大意は次の通りである。[2]

> ホーリー・バイブル。21巻、マラッカ、1823年。新約聖書の漢訳はモリソンが、イギリスで得た福音書、行傳、ローマ書の旧翻訳を中国に携帯したものに基づいて行った。[3] 「使徒行傳」は旧翻訳を改訂して、1810年に出版された。ルカは1811年、ローマ書の大部分は1812年に、パウロとローマ書はモリソン１人により改訂された。新約聖書は1813年に完成した。旧約聖書については、モリソンは創世記をはじめとする26書を翻訳した。残り（13書）はモリソンの監督下、ミルンによって翻訳された。

『神天聖書』は、旧約聖書の漢訳『舊遺詔書』（21冊、1823年）と新約聖書の漢訳『新遺詔書』（8冊、1813年、1823年）から成る。[4] 新約聖書については、27書のうち「使徒行傳」など14書が旧翻訳を改訂、13書がモリソン自らが手がけている。1葉がそれぞれ1行22字×8行で、『新遺詔書』27書では全537葉、約189000字、人名や音訳語の右横に傍線、地名には囲みが付けられている。また難解な語句（おもに音訳語）には上段枠外に解説がある。例えば「使徒行傳」には3個所あり、11-26の「基利士當」に対しては、「基利士當即是屬基利士督之教者」と書かれている。

3．『神天聖書』の文体

漢訳聖書の文体は「漢文（文言）→文理、深文理→浅文理→国語、官話→方言」（志賀1973）の5期に分けられる。また、「文理＝文言」ではなく、「文理」は西洋人による語彙（永井1999）であると言われる。『神天聖書』はふつう「文理、深文理（Wenli, High Wenli)」に入れられる。しかしモリソンは、翻訳にあたって、「忠実で、明快で、単純であることを心がけ、古典のことばよりも、ふつうのことばを選び、洗練より分かりやすさを取った」と言っている。[5)] そして中国語の文体には「古典語→中間（『三国志演義』に代表されるような文体）→口語」の3つがあり、『三国志演義』のような文体が、聖書にとってもっともふさわしい、と考えていた。モリソンは『三国志演義』の文体を目標としていたことになる。果たしてモリソンは目標に達していたのか、またそうであったとしたら「文理」という位置づけは意味を持つのだろうか。本稿では文体の分類にあたって、客観的基準としてロシアのヤホントフが定めた鑑定語を用いることとする。これは、ロシアのヤホントフが唐宋時代の文献について、その文体（文言・混淆体・白話（口語））を識別するために鑑定語として虚字26語を次のように定めたもので、氏はこの方法で文体の分類に成功している。

○ヤホントフの鑑定語

文言虚字

A組：其・之（代）・以（介）・於 / 于・也・者・所・矣・則

B組：而・之（定）・何・無・此・乃

白話虚字

C組：便・得・個 / 箇・了・裡・這・底 / 的・着・只・兒・子

この鑑定語は唐宋の文体を識別するためのものではあるが、清代の文体でも特に文言から白話のはざまにある「文言白話混淆体」と考えられる文献の文体を調べる上で有效だと考えられる。巻五の「使徒行傳（1行22字×8行、 全64葉、約22500字)」を中心に調査した結果、鑑定語の合計数は次のようになる。

A組（1572）

其	之	以	於	也	者	所	矣	則
289	325	144	272	90	217	143	84	8

B組（1379）

而	之	何	無	此	乃
325	630	66	51	195	112

C組（17）

便	得	個	了	裡	這	底	着	只	兒	子
1	3	0	0	2	1	3	3	0	0	4

A組（1572…53％）B組（1379…46.4％）C組（17…0.6％）という結果が得られた。語録・変文は文白混淆体で、特に変文では「B組：而・之（定）・何・無・此・乃」の使用頻度が高くなる。その理由としてヤホントフは「読者或いは聞く者にインパクトを与えるため、文献の作者が、意識的・人為的に「文言化」を図り、口語虚字にかえて文言虚字を多く使用した」のであると言う。「使徒行傳」でのB組の多さ、特に「之」の630という数はこのことを表しているのではないか。

モリソンが目標とすべき文体の代表と考えていたのが『三國志演義』であるが、ここで『演義』の卷一「祭天地桃園結義，劉玄德斬寇立功」（4272字）について調べてみると、

A組（97）

其	之	以	於	也	者	所	矣	則
17	27	5	17	13	12	4	1	1

B組（93）

而	之	何	無	此	乃
14	24	11	10	26	8

C組（34）

便	得	個	了	裡	這	底	着	只	兒	子
2	2	12	13	0	3	1	0	0	0	1

A組（97…43.3％）B組（93…41.5％）C組（34…15.2％）と、A組とB組がと

もに約四割強でほぼ同数、C組がその1/3の割合という結果が得られた。モリソンの「使徒行傳」に比べてC組の割合が非常に高いことが見てとれる。一応の目安として『三国志演義』の方を5.3倍して総字数を同規模にして比較してみると、次のようになる。

	『三国志演義』	「使徒行傳」
A組	514	1572
B組	492	1379
C組	180	17

数字から明らかなように「使徒行傳」に虚字の多さが目立つ。A組、B組では『三国志演義』の約3倍である。しかし白話的虚字であるC組は約1/10という少なさである。

次に、ブリッジマン＝カルバートソン訳「使徒行傳（21859字）」と比較（第一章から第五章に限った）してみると、以下のような結果になり、A組、B組は数字の上では大差がない。ブリッジマン＝カルバートソン訳ではC組は見られなかった。

	其	之	以	於	也	者	所	矣	則
モリ	60	65	33	44	23	62	36	12	1
ブリ	63	76	35	64	31	79	52	8	14

	而	之	何	無	此	乃
モリ	75	114	18	12	40	13
ブリ	47	94	15	10	43	17

また、トームの「particle（不変化詞）之・乎・者・也・矣・焉・哉」については、以下のような結果が得られたが、これも巻によってばらつきがある。

之	乎	者	也	矣	焉	哉
	36	217	90	84	33	0

全巻にわたって代詞は「我・吾・余・汝・爾・其・之・他・伊」、複数をあらわすものでは「輩・曹・等・(我) 儕・們」が使われている。なお、調査の範囲外ではあるが、巻八には「你們・他們」も多数見られる。

4．白話的語彙

「文理」に分類される『神天聖書』であるが、今回調査した「使徒行傳」には白話的語彙も多数みられる。そのうち幾つかについて該当する箇所を紹介する。また、各語彙ともに1例のみについて、ブリッジマン＝カルバートソン（文理）訳、欽定訳聖書、日本語文語訳を併せて挙げている。各語彙について個別に言及はしないが、文理訳、欽定訳、文語訳とそれぞれ比較対照されたい。

4-1.「使徒行傳」ヤホントフC組の虚字

○「便(1例)」

1）28-16　惟隨保羅便住偕兵守之者。

【ブ】惟保羅得許偕一守之之卒自居。

【欽】but Paul was suffered to dwell by himself with a soldier that kept him.

【文】パウロは己を守る一人の兵卒とともに別に住むことを許さる、

○「得(3例)」

2）10-10　其覺得饑而求食做方便時其心超出異照。

【ブ】饑甚・欲食・人具餐時・則靈遊象外・

【欽】And he became very hungry, and would have eaten: but while they made ready, he fell into a trance,

【文】飢ゑて物欲しくなり、人の食を調ふるほどに我を忘れし心地して、

○「裡(2例)」

3）10-30　至此時即九時・我在屋裡祈禱・

【ブ】適至此時・當申初・在家祈禱・

【欽】I was fasting until this hour; and at the ninth hour I prayed in my house,

【文】われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、

○「這(1例)」

4）16-20　曰，這些人乃如大人擾亂我邑。

【ブ】曰，此猶太人，騒擾我邑，

【欽】saying, These men, being Jews, do exceedingly trouble our city,

【文】言ふ「この人々はユダヤ人にて、我らの町を甚く騒がし、

○「底 / 的(3例)」

5）17-32　伊等聞死者之復活，有的笑，有的曰我等再聽爾講。

【ブ】眾聞死者復生之言，有戲笑者。有曰，我其再聽爾言此。

【欽】And when they heard of the resurrection of the dead, some mocked: and others said, We will hear thee again of this matter.

【文】人々、死人の復活をききて、或者は嘲笑ひしが、或者は「われら復この事を汝に聞かん」と言へり。

○「着(3例)」

6）26-16　主曰，我為爾所捕者耶穌。爾起立着，

【ブ】曰，我乃耶穌，爾所窘迫者。爾起，

【欽】And he said, I am Jesus whom thou persecutest. But rise,

【文】主いひ給ふ「われは汝が迫害するイエスなり。起きて汝の足にて立て、

○「子(4例)」

7）09-23　日子久後如大人謀殺之。

【ブ】既歴多日，猶太人謀殺掃羅，

【欽】And after that many days were fulfilled, the Jews took counsel to kill him:

【文】日を経ること久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、

4-2.「使徒行傳」に見られるその他のもの

○「從」（介詞）6例。「自」が最も多く、次いで「由」がある。「從」はほとんどが「付き従う」の意味であるが、まれに介詞がある。

8）17-31　且從死辈中復活，

【ブ】乃自死中復生之，

【欽】in that he hath raised him from the dead.

【文】彼を死人の中より甦へらせて

○「在」(介詞) 7例。

9) 11-05 我前在若巴邑祈禱，

【ブ】我在約帕邑，祈禱時，

【欽】I was in the city of Joppa praying:

【文】われヨッパの町にて祈り居るとき、

○「願意」

10) 15-34 惟西拉願意居焉。

【ブ】惟西拉決意居彼。

【欽】Not with standing it pleased Silas to abide there still.

【文】...なし...(異本に「シラスはそこに留るをよしとせり」の句あり。)

○「特意」

11) 09-21 此人豈非向在耶路撒冷攻害呼此名輩特意來此以拘解伊等于祭者之諸首乎。

【ブ】此人非在耶路撒冷，殘害顧斯民者乎，且來此，非亦為此故，欲繫是徒以解於祭司諸長乎。

【欽】Is not this he that destroyed them which called on this name in Jerusalem, and came hither for that intent, that he might bring them bound unto the chief priests?

【文】「こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害ひし人ならずや、又ここに来りしも、之を縛りて祭司長らの許に曳きゆかんが為ならずや」

○「不拘」1例。ほかの卷では多くあり、あとは「不論」が幾つか見られる。

12) 10-35 而不拘何處民，凡畏之行義者，則獲其接收也。

【ブ】凡國中有畏神而行義者，皆為其所納也。

【欽】But in every nation he that feareth him, and worketh righteousness, is acceoted with him.

【文】何れの國の人にても神を敬ひて義をおこなふ者を容れ給ふことを。

○「不但～乃 / ～且 / ～而 / ～即」5例。卷1から5に万遍なくある。

13) 27-10 不但為船為載之貨，且為我們之命矣。

【ブ】不第舟與貨，且及我儕生命矣。

【欽】not only of the lading and ship, but also of our lives.

【文】ただ積荷を船とのみならず、我らの生命にも及ぶべきを認む」

○「除～外」2例。巻1から5に万遍なくある。

14）27-22　然今勸爾眾安心，除船外不致壞一人之命。

【ブ】今我勸爾安心，爾中無一失生命者，惟失舟而已。

【欽】And now I exhort you to be of good cheer: for there shall be no loss of any man's life among you, but of the ship.

【文】いま我なんぢらに勧む、心安かれ、汝等のうち一人だに生命をうしなふ者なし、ただ船を失はん。

○「就」3例。

15）28-28　今使于異民，且其就聞之。

【ブ】施於異邦人，彼將聽之也。

【欽】that the salvation of God is sent unto the Gentiles, and that they will hear it.

【文】異邦人に遣されたり、彼らは之を聴くべし」

○「差不多」

16）26-28　亞其巴謂保羅曰，爾差不多勸著我為基利士當。

【ブ】亞基帕謂保羅曰，爾之勸幾使我為基督徒矣。

【欽】Then Agrippa said unto Paul, Almost thou persuadest me to be a Christian.

【文】アグリッパ、パウロに言ふ、「なんぢ説くこと僅にして我をキリステアンたらしめんとするか」

○「連 / 聯」3例。

17）15-02　而定保羅與巴耳拿巴連他班數人上耶路撒冷，問列使徒及老者明此事。

【ブ】眾定意遣保羅，巴拿巴，及其中數人，為此端，上耶路撒冷，見使徒長老。

【欽】they determinded that Paul and Barnabas, and certain other of them, should go up to Jerusalem unto the apostles and elders about this question.

【文】パウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上らせ、此の問題につきて使徒、長老たちに問はしめんと定む。

○「連～亦 / 連～」6例。

18）11-18　而讚頌神曰，連異民神亦賜之痛悔，

【ブ】歸榮於神，曰，是則神亦賜異邦人悔改，

【欽】and glorified God, saying, Then hath God also to the Gentiles granted repentance unto life.

【文】頓て神を崇めて言ふ「されば神は異本人にも生命を得さする悔改を与へ給ひしなり」

「連」については、太田辰夫1958、介詞17.17 包括・強調の項に「現代語では《連》を用いるが、包括のみならず強調のこともある。最近《包括》も用いるがこれには強調はない。古くは《和》もこれに用いられた。《連》が包括をあらわす介詞としてつかわれた例は唐代からある」、また「《連》が強調をあらわすようになったのはおくれて宋代からである」と言及されている。[6] 香坂順一1983では（46）“包括”と“連”で、「連」を英語の including にあたるものとし、さらに「連」が介詞や連詞に用いられる例は現在方言に見られるとしている。[7]

また、このほか「使徒行傳」には「該」「-過」「-去」「-上」「為甚麼」「爺們」「我們」「他」「地下」などが見られる。

○「臺場（げきじょう）」

19）19-31　亞西亞數尊貴人素為厥契友，亦差人請之毋投于臺場。

【ブ】亞西亞宗伯數人，與保羅為友者，亦遣人勸之，勿自投於戲館。

【欽】And certain of the chief of Asia, which were his friends, sent unto him, desiring him that he would not adventure himself into the theatre.

【文】又アジヤの祭の司のうちの或者どもも彼と親しかりしかば、人を遣して劇場に入らぬやうにと勧めたり。

4-3．ほかの卷で見られるもの

ここでは「使徒行傳」以外の『新遺詔書』に見られるものを２つ挙げる。

○「很 / 狠」3例。

20）マタイ04-08　又氐亞波羅帶之上狠高山示之看世間之諸國與國之榮也。

【ブ】魔鬼復攜之至極高之山，將天下諸國，以及其榮，示之，

【文】悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その栄華とを示して言ふ、

このほか、ルカ19-21とルカ19-22に各1例見られる。

○「總」

21）ルカ01-61　伊謂之，曰，爾親總無稱此名。

【ブ】眾謂之曰，爾親戚中，無名此名者。

【文】かれら言ふ「なんぢの親族の中には此の名をつけたる者なし」

巻五「使徒行傳」以外ではこのほか人称代詞の「你們」「他們」などが多数見られる。

5．その他若干の語彙について

○「麵包（パン）[8)]」

モリソン『字典』"A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE PART II"では「BREAD」が「麵頭 meen tow; 麵包 meen paou. Bring the bread, 拿麵頭來 na meen tow lae.」となっている。聖書では「パン」は非常に重要に位置付けられているが、今回調べた中で見られた「パン」に対する訳語は「餅・麵・麵餅・麵頭・麵包」と様々である。このなかでは「餅」が圧倒的に多い。「使徒行傳」では、02-42の「恆守使徒之訓通其劈餅而祈禱（彼らは使徒たちの教を受け、交際をなし、パンを擘き、祈祷をなすことを只管つとむ）」をはじめ、5例すべて「餅」である。「麵包」は「聖路加福音書（ルカ）」の3個所で用いられている。ここではルカの用例を1つ紹介する。

22）24-30　會在席時，其取麵包言之福，擘之，而分與伊等。

【ブ】在席間，耶穌取餅祝謝，擘而予之。

【文】共に食事の席に著きたまふ時、パンを取りて祝し、擘きて与へば、

○「議會（ぎかい）」6例。同義のものには「公所」と「會所」がある。他の卷にも見られる。「裁判官」にあたるものには「審司」が、「裁き」にあたるものには「審判」がある。

23）24-20　然此等亦可言我在厥議會中，責我有何不公平之情。

【ブ】或我立議會前，在茲者見我有不義之處，亦可言也。

【欽】Or else let these same here say, if they have found any evil doing in me, while I stood before the council.

【文】或はまた此処なる人々、わが先に議会に立ちしとき、我に何の不義を認

めしか言へ。

○「原告」5例。「被告 / 被告人」もある。

24) 25-16 我答以羅馬規矩不容被告人未曾對質諸原告以能表白己罪而先被問罪。

【ブ】我曰，被訟之人，未得與訟者面質，以自訴己事，遂付之於死，非羅馬人例也。

【欽】To whom I answered, It is not the manner of the Romans to deliver any man to die, before that he which is accused have the accusers face to face, and have licence to answer for himself concerning the crime laid against him.

【文】我は答へて、訴えらるる者の未だ訴ふる者の面前にて弁明する機を与へられぬ前に付すは、ロマ人の慣例にあらぬ事を告げたり。

最後に現代語と意味が異なるものを2つ挙げておく。

○「工業 (work)」

25) 13-02 伊等事主而齋時聖風謂之曰，汝曹拔掃羅與巴耳拿巴，置與伊以就我所為取伊等之工業也。

【ブ】事主禁食時，聖靈曰，為我甄別巴拿巴，掃羅，俾行我所命彼之職。

【欽】As they ministered to the Lord, and fasted, the Holy Ghost said, Separate me Barnabas and Saul for the work whereunto I have called them.

【文】彼らが主に事へ断食したるとき、聖霊いひ給ふ「わが召して行はせんとする業の為にバルナバとサウロとを選び、別て」

○「落地 (地面に倒れる)」

26) 26-14 我儕既偕落地，余聽聲希百耳音曰，掃羅，掃羅，

【ブ】眾皆仆地，我聞聲亦希伯來方言語我曰，掃羅，掃羅，

【欽】And when we were all fallen to the earth, I heard a voice speaking unto me, and saying in the Hebrew tongue, Saul, Saul,

【文】我等みな地に倒れたるに、ヘブルの語にて「サウロ、サウロ、……」といふ声を我きけり。

6．さいごに

本稿では巻五「使徒行傳」に範囲を限定して調査した。現在未だ調査中ながら、巻によって、ヤホントフの鑑定語の割合が違う。例えば巻一では「也」、巻三では「焉・矣・哉」などが目立つといった具合に、文体の特徴も一様ではないように思われる。のちにメドハーストは、モリソンの弟子梁阿発の言を引用し「この聖書で用いられている文体は、慣用的表現にはほど遠い。翻訳者はさまざまな文字を使い過ぎたり、慣用に反した文句を用いているので、（中略）余分な助辞を削り、不適当な表現を改め」る必要があると述べたが[9]、これはモリソンが読者に分かりいいように平易な口語的なことばをてんこ盛りにした結果だとも言えよう。またSamuel Kiddは「おもな欠点は、原文の語順に忠実に訳しすぎていることで、中国語の慣用的な語順に対しても同じような忠実さで配慮をしてほしいのであると言ったが[10]、「使徒行傳」を見る限りではこれは的を得た指摘であると思われる。本稿を通して見てきたように、洗練されていないながらも個別のことばでは十分に口語的な要素を有していると思われる。総じて言えば、同じく文理に分類されるブリッジマン＝カルバートソン訳と比較してみると『神天聖書』を文理とするには違和感を覚える。では「文理」に分類される『神天聖書』の文体や語彙の特徴はどのようなものか、また「文理」という分類はふさわしいものなのか。「文理」の特徴や文体とは具体的にどの様なもので、「浅文理」などと如何に線引きされるものなのか。また、これら線引きの中国語への影響など、このモリソンの『神天聖書』をはじめとする漢訳聖書を通して探ってみたい。

また、時折「麵包」や「議會」などの語彙が、顔をのぞかせることから、新しい語彙の形成の過程や、モリソンの路線を基本的に継承したブリッジマン＝カルバートソン訳を経由しての日本語訳聖書への影響などを見る上でも『神天聖書』は資料としての可能性を持っているといえるのではないかと思われる。

注：

1) England, Northumberland（イングランド北部ノーサムバランド）

2) 原文は次の通りである。「9.神天聖書 Shin t'ëen shing shoo. The Holy Bible.21 Vols. Malacca, 1823. The New Testament of this version was made by Dr. Morrison on the basis of an old version of the Gospels,

Acts and Epistles, which he obtained in England, and brought out with him to China. The Acts was revised from the old M.S. and first printed in 1810; Luke was printed in 1811; most of the Epistles were printed in 1812, the Pauline Epistles being merely revised by Dr. Morrison; the New Testament was completed in 1813. In the Old Testament, Dr. Morrison translated Genesis, Exodus, Leviticus, Numbers, Ruth, Psalms, Proverbs, Ecclesiastes, Canticles, Isaiah, Jeremiah, Lamentations, Ezekiel, Daniel, Hosea, Joel, Amos, Obadiah, Jonah, Micah, Nahum, Habakkuk, Zephaniah, Haggai, Zechariah and Malachi. The remaining books were translated by Dr. Milne, under the superintendence of Dr. Morrison.」

3) 18世紀初頭にパリ外国宣教会のジョン・バセの『四史攸編』(新約聖書の一部) を参考にしている。モリソンはロンドン在住中に大英博物館にて筆写した。また吉田寅1997では、『神天聖書』と『四史攸編』の一部比較がなされている。

4) 『新遺詔書』8冊の内訳は、巻一「聖馬竇傳福音書」71葉、巻二「聖馬耳可傳福音書」45葉、巻三「聖路加傳福音書」70葉、巻四「聖若翰福音之書」58葉、巻五「使徒行傳」64葉、巻六「聖保羅使徒與羅馬輩書」から「聖保羅與可林多輩第二書」71葉、巻七「聖保羅與厄拉氐亞輩書」から「聖保羅使徒與弟多書」61葉、巻八「聖保羅使徒與腓利們書」から「聖若翰現示書」97葉である

5) 「中国語の「説話」とか俗語は、読書人に軽蔑されてはいるが、程度の低い俗な表現なのではなくて、民衆の共通のことばであり、教育のある人だけに分かる高級で古典的で難しい文体と違っているのである。わたしの翻訳では、忠実で、明快で、単純であることを心がけた。めったに使われない古典のことばよりも、ふつうのことばを選んだ。異教徒の哲学者や宗教家が使うような用語を避けた。洗練されてなくても、分かりやすいようにした。」Memoirs of the life and Labours of Robert Morrison, Compiled by his Widow, vol.II, Longman, London 1839, p.10 (訳は柳父章1986より)

6) 先ず「《連》が包括をあらわす介詞としてつかわれた例は唐代からある」として「若數西山得道者，連予便是十三人 (施肩吾詩)」と「何時猛風來，為我連根拔 (白居易詩)」の2つの例文がある。次に「《連》が強調をあらわすようになったのはおくれて宋代からである」として例文「今人連寫也自厭煩了 (朱10)」が挙げられている。

7) “包括”と“連”の項で示された例文は「現在這裡的人，從老太太起連上園裡的人，有多一半都愛吃螃蟹的（紅樓夢37）」などであり、また「介詞や連詞に用いられる例として『普通話論集』171頁の例「我跟你一塊兒去=我連你一塊兒去。」と「我的年紀何他一樣=我的年紀連他一樣。」を挙げている。

8) 「パン」にあたる中国語の語誌については、尾崎實1991「清代末期におけるパンの受容度」（関西大学文学論集40巻３号）を参照した。

9) W. H. Medhurst, China; Its State and Prospect, London 1842（訳は柳父章1986より）

10) 同じくW. H. Medhurst 1842（訳は柳父章1986より）

使用テキスト

『新遺詔書』（影印）香港聖經公會 1997

『新約全書』上海美華書館　1864

『舊新約聖書・文語訳』日本聖書協会　1991

THE BIBLE AUTHORIZED KING JAMES VERSION

主要参考文献

太田辰夫1981　『中国語歴史文法』朋友書店（1958江南書院版景印）

尾崎實1991　「清代末期におけるパンの受容度」（関西大学文学論集40巻３号）

香坂順一1983　『白話語彙の研究』光生館

永井崇弘1999　「近代西洋人と中国の言語の分類」『国語国文学』38号　福井大学国語学会

柳父章1986　『ゴッドと上帝』筑摩書房

都田恒太郎1974　『ロバート・モリソンとその周辺』教文館

ヤホントフ1969　「七至十三世紀的漢語書面語和口語」『漢語史論集』1986　北京大学出版社

吉田寅1997　『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院

MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE, 1867 上海

Memoirs of the life and Labours of Robert Morrison, Compiled by his Widow, vol.II, Longman, London 1839

新 着 論 文

文献データベース構築の準備として、中国、日本の学会誌等に発表された関係論文を収集中。情報提供のご協力をよろしくお願いします。

guowei@ipcku.kansai-u.ac.jp

「加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について」
荒川清秀1999『中国21』 (愛知大学現代中国学部) 3号：25-30
「近代日中学術用語の研究をめぐって(小特集 漢語と日本語)」
荒川清秀2000『中国21』 (愛知大学現代中国学部) 6号：237-254
「明治初期における漢語洋書の受容——柳原前光が購入した書物を中心に」
陳力衛2000『東方学』99号：61-74
「台湾における国語(中国語)教育」 武井満幹・森岡文泉2000
『中国学研究論集』(広島中国学学会)3号：83-91
「中国語の“銀行”について」 孫遜2000『国語国文学』
(福井大学国語学会)38号：66-57
「福沢諭吉『増訂華英通語』の“音訳”と“義訳”」平井一弘2000
『大妻女子大学紀要』文系31：290-250
「明治期熊本における中国語教育（1)」野口宗親2000
『熊本大学教育学部紀要人文科学』48：133-149
「偉烈亜力所介紹的外国数学知識」汪晓勤2000『中国科技史料』21-2：158-167
「明末清初西方地圆説在中国的伝播與反響」陳美東・陳暉2000
『中国科技史料』21-1：6-12
「帕切斯著作中的中国地図」杜石然・杜芳2000『中国科技史料』21-1：65-69
「《天步真原》與哥白尼天文学在中国的早期伝播」石云理2000
『中国科技史料』21-1：83-91
「哥白尼日心地動説在中国的最早介紹」 楊小明1999『中国科技史料』20-1：
「関於“語法”一詞出現的年代」 馬国強2000『中国語文』275：188
「キリスト教と科学の大衆化——蘭学の背景——」 八耳俊文1999
『総合文化研究所年報』7：51-72
「西周と『明六雑誌』の訳語」 手島邦夫2000
『国語学研究』（東北大学文学部）39：12-21
「韓国語に受容された日本語語彙～漢語を中心に～」 白岩美穂2000
『日本語・日本文化研究』（京都外国語大学）7：46-55
「『和英語林集成』「英和の部」の見出し語——各版における削除語——」 木村一2000
『文学論藻』（東洋大学文学部紀要）74：左1-20

（沈国威・森本亮介）